

仏教のこころと福德

金剛大學校創立十周年に当たり、謹んで心からお慶び申し上げ、貴学の教育と研究の輝かしい成果に敬意を表します。両学校の交流がさらに進展し、大いなる福德あらんことを祈念します。

仏の教え

仏教はごく常識的な生き方を提唱した人生哲学と言える。

釈迦の生涯は多くの伝説に彩られるが、その一つに、生まれるとすぐに七歩あるき、右手を挙げて「天上天下唯我独尊」と言われた、というものがある。

この一文には、釈迦がこの世に出現した目的と教えが込められている。その教えとは、私たち一人ひとりの尊い存在とは、天にも地にも他と比べようがない唯一の存在であり、それ故に各々の内にある聖なる徳性を育み活動すべきである、というものである。

七歩とは、釈迦が一生涯にわたり、身命を賭して、苦悩する人々に向きあい教化したことを示している。

こうした尊い一々の存在を自覚し、常識的人生を実践するため、仏教は次のように諭す。

諸の悪を為す莫れ。衆くの善を行じ奉れ。

自が其の意を浄くせよ。是れ諸仏の教えなり。

(七仏通戒偈)

この一偈は、仏教の実践を示した根本的な教えである。

悪とは、自己中心的な言動をいう。すべてと共に生き、すべてのものに生かされてい

る自分を忘れてはならない。善とは、すべてのために生きることである。そのためには、自己の心を調べ、浄めておくことが大事である。これが諸仏の教えである。内容は非常に簡単なものであり、誰でも承知していることであるが、これを継続的に実行するのは難しい。

そこで釈迦は、このことを伝え諭すために、たくみな手立てを設け、智慧をふるい、忍耐強く、慈悲心をもって、つまりは対機の説法を、生涯を通じて全うしたのである。それらの教えは、八万四千の法門といわれ、あらゆる角度から真の人生、そのあるべき姿を説き示している。

人間とは何か

仏教では「一人の人は人間にあらず」と言い、人と人との間で人間になると教える。あらゆる存在とともに、生き、生かされていることを自覚せよと教えるのである。ただし、

「人生は意の如くならない。現実と思ひ願うところは異なり、苦と楽はいつも共にやってくる」(源信 942-1017)

私たちは、常に自分を中心に捉え、大事に生きたい、思い通りになりたい、とこだわっている。その度に、いかり、愚痴り、欲のこころを起こして悩み苦しむのである。思い通りにならない現実を認めるとき、他を知り己を知り、真の自分の成すべき最上の道が開ける、そのように教えている。その際に忘れてはならないことがある。

「恵みはすべてのものに平等にゆきわたっており、人々はそれを毎日つかって生きているのに、そのことに気づかない」

(智顛 538-597)

眼には見えないが、自分の回りにあるものすべては仏縁であり、それが私たちを照らし、いっそう輝きを増すように仕向けているのである。だからこそ、高ぶらず、謙虚であわてず、ゆっくり恐れずに、自在な活動にできるべきである。

仏教の世界観

仏教では、この世界を羅網にたとえている。羅網とは、網の結び目ごとに色とりどりの宝珠が連なっているものである。その大羅網がこの世界を覆っているとされる。青、黄、赤、白、黒など色々の宝珠とは、私たちのところである。網とは縁である。宝珠は、たがいに他を照らし合い、妙なる光明の世界を展開している。ただし、その内の一珠でも輝くことを怠るとたちまち網全体にその影響が伝わる。ここには支配者がいるわけではない。たがいにこだわらず平等の縁によって結ばれ、照らし、照らされている光明の世界なのである。どれか一つが自己中心的になると全体にひびく。一つは全体を照らし、全体は一つを輝かせる。このたとえば、私たちに平等の縁による調和の世界を提唱しているのである。

このあり方を詩の一節をもって説くことがある。「柳は緑、華は紅」という一節である。

花の紅が添えられるからこそ柳の緑がひときわ映え、柳の緑が添えられるからこそ花の紅も本来の美を際立たせる。

金剛大 schools と大正大学の交流も柳と華のようにあることで、仏天の加護をうけ、大いなる福德にあずかるものと確信している。

貴学の益々の隆昌を祈念します。

大正大学 名誉教授
多田孝文

本文は、平成二十四年十一月に韓国・金剛大 schools で開催された第一回共同セミナーに際して、当時の大正大学学長多田孝文が寄稿した文章を再録したものである。なお、再録にあたっては役職名を変更（平成二十七年三月現在）している。